

アイヌの薬草と風呂 —まぼろしのキムンキンニ

今ではどこの家にも浴室が設けられており、“銭湯”といわれる風呂屋さんの数も少なくなってきた。しかし昭和三十年代までは家庭風呂の普及率も低く、銭湯は町にとって必要な保健衛生施設でもあった。

明治末期の人びとのくらしの中でも、家庭用の風呂が設置されていた事を語る人は少ない。当時この地に入植してきた和人たちは、食料生産活動に従事するだけでなく、生活環境を整えたり、病気怪我の予防に努めたりする事にも意を払って来たようであるが、いずれも不十分なものであったことは容易に推察できる。

むしろ当時はアイヌの人たちの生活は豊かであり、長い間この地の自然を尊びながらその恩恵を巧みに取り入れ、様々な知恵と工夫に満ちた生活をしていた。

一部の地主は五右衛門風呂などを有していたようだが、和人のほとんどは風呂を持つことがなかった時代に、アイヌの人たちは自家製の風呂をもち、家族で湯浴（ゆあ）みを楽しんでいたし、多くの病気を治すことにも効果を上げていたと言う。

その風呂とは、直径一メートル以上の丸太をこれまた一メートル位の長さに切り、それを臼を作る要領で手斧を使って丹念に彫り込み、だいたい大人が座って腹部まで隠れる程度のものに仕上げ、そこへお湯を入れて湯浴みをしたものだった。当時はまだ大木も自生し、素材にはある程度こと欠かなかったようではあるが、人間の体を清め、病魔より守るという深い信仰を元にするアイヌの人びとは、これを作るのにも十分木を選び、選定、伐採、製作のいずれの過程においてもカムイに謝し、その風呂を非常に大切に使用するため、その保存に随分と留意したと伝えられている。

この風呂は、他人に対してもきわめて温情厚いアイヌの人びとであるため、和人をもよく招き、それを使用させ、時には婦人病の治療にも使用したという。

当時野深で子宮が悪く困っていた婦人がいて、その話を聞いたナムシュイというアチャポ（世帯主）が、自分の母親も以前そういう病気のために苦しみ、オトンブリキナという草を風呂に入れたり、それを袋に入れてお湯で温め、局部を温湿布して治した事を知っていて、その婦人にすすめ自宅に通わせつけさせたところ、数週間ですっかり治った。その婦人及び家族の喜びは法外なもので、着物やその他沢山の物をもってお礼にきた事が語り伝えられている。この薬草は今でも、浦河のあちらこちらに自生していると言われるが、その学名など詳らかではない。

このころの人たちが一番不安に思いもし、また不自由もしたものに、医療機関及び疾病怪我に対処する薬の不足があったのは当然のことで、アイヌから学んだ風呂の自作や、これらの療法が当時の和人にとって大きな支えであったと思うが、これを語る人も少なく、記録にも残っていないのはまことに残念である。

野深の川辺にキンニという樹が生えていた。この薄皮を剥いて煎じて飲むと、風邪の妙薬で、アイヌは古来より服用していた。特に高熱を伴う、肺炎に近い重症によく効いたものであった。和人と親しくなったアイヌは、請われるたびにキンニを煎じて和人宅を訪れ病人に飲ませてやり、また必要に応じ多くの薬草とその効用及び服用の仕方を教え、生死の境にある人を救った事も数しれずとい

う。恵まれて本州方面から薬品の提供を容易に受けることができた一部の人を除いては、アイヌの薬草療法に教えられ健康維持に努めることができたのでもある。

このキキンニは、山に生えるキムンキキンニと呼ぶものと、川辺に生えるキキンニとがあり、ニガキのような色をした黒い樹で、両者ともこの樹皮の下の黄色い薄皮を剥いで煎じて服用したものである。そしてこの効用を知った浜の漁師たちは、冬の漁場の暇なときに野深まで通ってそれをとりに来ていた。特にそれはルスナイの山際の川原に、柳と一緒に多生していたが、あまり太いものはなかった。今考えてみると、毎年それを採取するため太いものがなかったのだろう。漁師たちはそれを束にしてどんどん切り出していくため、アイヌの人たちはその樹の激減を恐れ、漁師に何度も注意をしたことも伝えられている。漁師たちは「これは皆で分けて大事に使うから」といっていたが、その頃からキキンニはだんだん少なくなっていったようである。

最近では河川の改修などで川原に手を加え、コンクリートブロックなどによる護岸整備に伴い、まったく見るができなくなった。山に生えているというキムンキキンニは今それを見分ける古老も皆無に等しいという。

[文責 郷内]

【話者】

浦川 タレ 浦河町堺町東 明治三十二年生まれ（平成三年十月没）